死者の木霊（こだま）

内田康夫

Yasuo Uchida

N. D. C. 913　310p　18cm

死者の木霊

一九九五年三月五日　第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者―内田康夫　© UCHIDA Yasuo 1995 Printed in Japan

発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一　編集部〇三―五三九五―三五〇六
販売部〇三―五三九五―三六二六
製作部〇三―五三九五―三六一五

印刷所―豊国印刷株式会社　製本所―株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-181833-3（文三）

死者の木霊

こだま

内田康夫

Yasuo Uchida

講談社
NOVELS

ISBN4-06-181833-3

C0293 P800E (0)

死者の木霊

内田康夫

定価800円(本体777円)

信州の山深いダム湖に浮かんだバラバラ死体。事件犯人と目される被害者の甥夫婦の「心中死」により早結着を見た。だが二人の眠るような死顔は、竹村巡査長を孤独な捜査行へと駆り立てた。犯人が仕掛けた酷周到なアリバイ工作を竹村は果たして崩せるか？者不朽のデビュー作に、新たに自作解説を付した。

死者の木霊（こだま）

内田康夫

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

カバーデザイン＝熊谷博人
ブックデザイン＝辰巳四郎

目次

プロローグ 7
松川ダム 13
刑事たち 47
秋霖前線 76
霧の挽歌 121
白鳥の死 153
第五の死者 191
遠き木霊 231
崩れる 259
エピローグ 291
自作解説 297

プロローグ

いま一歩、のぼりつめそうになる寸前で、はぐらかされる。躰中のありとあらゆる末梢神経が、爆発しそうなところまで昂まり、歪んだ唇の端から我知らず呻きが洩れ（ああ来る……）と戦慄の襲来を予感した瞬間、男の手は蠕動を止めた。その部分から波状的に拡がっていた甘美な快感は、とたんにエネルギーを失って、せっかくの昂まりが、すうっと遠退いた。

「ねえ、どうしたのよォ」

遁げかける快感を繋ぎとめようとする願望と苛立ちを露に、君江はうわずった声で言った。

「ん？　ああ……」

孝平は思い出したように愛撫を再開する。しかし、いったんしらけた官能がリズムを取り戻すには、何倍もの時間が必要なことを、君江は経験で知っている。それに孝平の指の動きが、心ここにあらざるような、おざなりなものであることも、君江の掌の中にある男の部分が、いくぶん弛緩したままであることで分かった。

もともと、野本孝平は精力絶倫というタイプではない。どちらかといえば、中肉中背の平凡な初老の男というイメージだ。店の常連の中でもとりわけてこわもてするわけではなく、ただ金離れがいいだけが取柄の、だからこそ店にとっては上客であるというだけの、とおりいっぺんの付き合いが長かった。

「ノモさんと一度寝てごらんよ」と奨めたのは同僚の松子である。店を辞めて郷里へ還る話をしたあと、そう言った。君江は松子が孝平とそんな関係にあるとはついぞ思ってみたこともなかったし、だい

いち、そういう艶めいた連想とはおよそ無縁なような孝平の印象であったから、まるで現実性のない笑い話でその時は了った。

君江の男遍歴といったところで、二十八歳という若さではたかが知れている。君江自身セックスに関しては淡白な性格だと思いこんでいた。その頃付き合っていたのは、三十三になる会社員で、週に一度の割でモーテルへ行ったりしているが、その男を含めて、過去の男たちに共通した、遮二無二突き進んでくるようなセックスには、どうにも乗りきれないところが君江にはあって、それはたぶん、自分の淡白さのせいだと信じていた。

孝平とのことは、去年のクリスマスの晩が最初である。

近頃は家族サービスのファミリークリスマスが流行りだとかいうことだが、それでもどうにか客の入りの悪くないどんちゃん騒ぎの閉店まぎわにやってきて、おしぼりを渡す君江の耳元に口を寄せ「Tホテルに、あんたのための部屋をとってあるのだが」と囁いた。とっぴすぎて、孝平の、それが口説き文句だということに、君江は一瞬、気が付かなかった。

クリスマスイヴは上すべりに華やぐばかりで、独り身の女にとってはつらい夜でもある。そういうタイミングの捉え方が憎い、と君江は思った。けれども、悪い気がしたというのではなく、むしろ男の優しさのようなものを感じていた。同時に（この人も孤独なんだわ、きっと――）と、なにがなし愍れみのような母性本能めいたものをそそられ、それがどうやら、孝平の誘いに応じる決め手になった。

もっとも、年齢をいえば、孝平は五十代後半といったところで、父娘ほどの差がある。しかし孝平にはいつも文学青年のような稚気と翳がつきまとっていた。陽気な作り話で女たちを笑わせていながら、心の底流には虚無感が漂っている。眼の動きや話しぶりのはしばしに、ほんのわずか、それがあらわれ

るのを君江は感じることがあって、そんな時、ふっと孝平と視線がぶつかったりすると、お互いが泣き笑いのような表情を泛べ、あわててあらぬ方へ眼を転じるのだった。

フィーリングが合うのかも知れない——という予感らしきものは、かなり以前から芽生えていたことは慥かだ。だから、孝平とそういう関係になること自体には、君江はさほどの抵抗を感じなかった。

孝平のベッドテクニックは、こまやかな前戯とゆきとどいた後戯が特徴で、本来のセックスはむしろ全体の構成上欠かすわけにはいかない、いわば画龍点睛の意味あいで行なうようなところがある。これは君江にとって、従来の性知識とは、はなはだしく異なるものであった。君江の官能は、孝平の掌や指や唇や舌先で芸術品のように彫り出され、昂められ、燃焼し尽され、やがてゆったりとした大海のような安らぎとまどろみの中に誘われてゆく。（これがセックスなんだわ）と、君江は眼を洗われる想いがした。

最初のTホテルもそうだったが、孝平は常にそれと同程度の一流ホテルを予約して、君江を誘った。モーテルとか連れ込みホテルしか知らなかった君江にしてみれば、そのことだけでも充足した気分に浸りきれる。孝平も単なる一流趣味や見栄だけでなく、夜の饗宴を演出するために必要な道具立てとして、そういう場所を選んでいるようであり、事実、そのことが、君江に次回の招待を心待ちにさせる因子にもなっていた。

東京を離れてデートすることはめったにない。あってもせいぜい横浜どまり、今度のように遠出したのは初めてのことだ。お互い、人目を憚らねばならぬような背景を持たぬ者同士であるし、なにより、遠隔地へ出掛けるとなれば、君江は店を一日休むことになる。それを承知で誘うからには、孝平にそれなりの心算りがあっての上だろう。金銭的なことは言うつもりのない女だが、君江は、そういったこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も思い合わせて、孝平の自分に対する気構えが少しずつ変化していると感じた。だから、孝平から「今度、鳥羽へ連れて行ってあげよう」と言われたとき、素直に喜ぶことができた。

「鳥羽って、あの伊勢、志摩の？」

実際のところ、君江には、伊勢、志摩や鳥羽といった地名にはにがい記憶がある。女子高校の修学旅行がその方面への旅だったのを家庭の事情で参加できなかった。級友にもらった土産の真珠にさえ差別感がこめられているように思え、そんなふうに感じる自分の心の貧しさが悲しくて、泣いた。そういう思い出があるだけ、よけいに君江は心が弾んだ。

おそらく孝平は、念を入れて選んだのであろう。ホテルは洗練されたムードの高級なものであった。七階の部屋からの眺望も絶品で、この地方独特の明るい風光、波立ちの少ないしっとりと落ち着いた海の色が、リアス式海岸の複雑な構図とあいまって、いかにも日本的な美しさに満ちみちている。君江はまるで新婚の花嫁のように浮き立つ想いと、ういういしい羞らいに浸りながら、着いた早早から、夜の営みへの予感で、躰の潤むような気分に襲われた。

それにしても今夜の孝平は、よほどどうかしている。献身的なまでに君江との行為を大切にするこの男が、愛撫を中断するなどは、これはもはや異変といってよかった。せっかくのお膳立てで期待感が大きかっただけに、昂まりが凋んでゆく時の、背筋を奔る遣る瀬ない疼きに、君江は思わず身もだえた。

「ねえ、何考えてるの？」

「うん……」

孝平は生返事をして、眸を宙に据えた。関心の逸れたことすら、もはや隠す気がないらしく、君江の躰に置いた手は完全に動きを止めている。

「誰だったかなあ……」

（ああ、あの女のことなんだわ）と君江は思い当たった。

夕食のあと、最上階にあるラウンジへ行ってブラ

ンデーを飲んだ。ぐるりがガラス張りで、展望を妨げないために室内の照明を極端に落としているから、志摩半島一帯の夜景があざやかに浮かびあがって見える。時期はずれのせいか、それとも夜の早い新婚客が多いせいか、ラウンジは閑散として、ムードミュージックが低く流れているほかは話し声も聴こえてこない。客待ち顔のボーイたちがフロアのあちこちに佇んでいる。他人事とはいえ商売柄、君江にはこの静けさがかえって落ち着かない雰囲気であった。お客が来ればいいのにと思っていると、お誂えむきにアベックの客が入ってきた。君江たちのいるテーブルの脇を通って、奥の席へ向かう。その女の方の顔を見て、君江は目を瞠った。

室内の照明はテーブルの上のキャンドルライトのほかは、天井のあちこちに埋め込まれたスポットライトが細い光束を床に投下しているだけで、女の顔がその光の中に浮かびあがったのはほんの一瞬ともいえる短い時間だが、それにもかかわらず、その女の美しさに君江は見とれてしまった。

年齢は君江よりわずかに若い二十六、七歳か。いわゆる目鼻立ちの整ったという表現だけでは言い尽せぬ気品と知性と、それにも増して女の美しさを深みのあるものにしているいいしれぬ憂愁の翳りが、君江に与えた印象をきわ立たせた。

それにしても、なんてきれいな女だろう。そう思いながらふと気がつくと、孝平も君江の肩越しにしきりに視線を送っている様子だ。その眸の色は、なみなみならぬ関心を物語っている。男ってどうしてこうなのだろう。あたしの存在を越えて他人の女に興味を示すなんて——。君江は口惜しさがこみあげ、飲みさしのブランデーグラスを邪険にテーブルに置くと、ついと立って「お部屋へ戻りましょう」と孝平を促したのだった。

いま孝平が気がかりなのは、きっとその女のことに違いない。

「あの女のこと、考えてるのね」

君江はベッドの上に半身を起こして、険のある声を出した。
「ん？　女？……」
孝平はうろたえた目で君江を見た。
「隠したってだめ。さっきラウンジで見た女の人のことが気になっているんでしょう」
孝平は困ったような顔をしていたが、急にはっと真顔になり、それから今度はいかにもおかしそうに笑いだした。
「あはは、そうか、女か、なるほど」
「笑ってごまかさないで！」
孝平の笑った顔が、ふいに君江の視野の下へ消え、次の瞬間、君江は下腹部に熱っぽい圧力を感じた。
「あ、だめ、いやよ！」
君江は悲鳴を上げた。しとどに濡れているであろうその部分に、孝平の唇が押し進んでくる情景を思い、その羞恥に堪えかねる想いが、冷めかけていた君江の情慾を急速に燃え立たせていった。

松川ダム

1

長野県飯田市の南縁に沿って流れ、天龍川に注ぐ川を「松川」という。流路延長二十六キロ。水源を木曾山脈の念丈岳、安平路山といった標高二千数百メートル級の山山に発している勾配の大きい急流である。かつてこの川は「あばれ松川」の異名をとるほどの荒廃河川であった。台風やちょっとした長雨のたびに出水し、大量の土砂を押し出して、流域にあたる飯田市や鼎町、上郷町などを直撃した。あいつぐ陳情の結果、昭和四十九年にダムが完成した時は、だから、地元住民はこぞって祝福したものであった。

松川ダムは、洪水調節を主目的とする、上水道、かんがい用水取水など、いわゆる多目的ダムとして長野県が建設した重力式コンクリートダムである。もともと荒れ放題の急峻な渓谷で、人家はおろか田畑もないようなところだったから、ダム建設につきものの〝湖底の村〟といった哀話もない。むしろ、観光立県の長野県にありながら比較的に観光資源に恵まれていない飯田地方にとって、人造湖とはいえ、山脈に抱かれた静かな湖面の誕生がゆくゆく、観光の目玉商品になりうる可能性をもつものとして充分期待された。ダム完成と同時に、鯉やニジマスの稚魚が放流されたのも、そういう思惑を秘めた事業の一端であったが、その狙いどおり、魚たちは釣りの対象として立派に成育していた。

十月六日、西山建一は従弟の佐野実とふたりで、ダムの松ケ窪あたりに釣糸を垂れていた。

「松ケ窪」とは西山が付けた名である。おおむね峻

険な湖岸の中で、ここは平坦で足場もよく、釣り場所として格好の低地だ。伐り残された松が一本、よい枝ぶりを湖面に投げかけている風情もわるくない。

西山は飯田市内で親の代からの薬局を経営する男で、ことし四十二になる。松川とは幼時から岩魚釣りで親しんできた。ダムができて岩魚がだめになってからも、長いことかけて広い水域の中から魚の集まるポイントを探しあてた。その中でも「松ケ窪」は秘蔵の場所として、ごく親しい者にしか教えないことにしている。佐野は西山の父の妹の息子で、七つ齢下だ。伊那市に住んでいるが、中央高速道路が部分開通して車で三十分の距離になってから、週に一、二度はこうして連れ立ってダムを訪れた。

朝六時頃から釣りはじめて、十一時頃までにはまあまあの釣果があった。西山はひと息入れようと、ポケットのハイライトを一本抜いて唇の端に銜え、ライターをまさぐりながらぼんやり浮子のあたりを眺めていた。風の方向が変わったのか、水面に漣が立って、こっちへ渡ってくる。

その時、西山は異様な臭気を嗅いだ。とたん、佐野が顰めた顔で振りかえった。

「建さん、くせえ屁たれるなや。はらわた腐ってるでねえかやァ」

「なに言うだや、実さんこそロクなもん食っとらんずら」

そうやり返してからすぐに気付いた。

「こりゃ屁の臭いと違うで、犬か猫の死骸でもあるんでねえずらか」

「そうだな、死臭だな。誰かダムの中に捨て猫でもしやがったかなや」

二人は薄気味悪そうに湖面を見渡した。釣り針に猫の死骸がひっかかりでもしたひにはかなわない。早早に仕掛けを引きあげた。

高い位置から見下ろすと、かなり透明度の高い碧い湖面なのだが、水面に近いここからでは波の乱反

射が強く、かりに漂流物があったとしても容易に発見できそうにない。西山はこわい物見たさのような、あまり気乗りのしない足取りで斜面を這い登り、臭気の源とおぼしき方角に眸を凝らした。

「ああ、あれらしいな」

それは、なにやら白っぽく座蒲団ほどの大きさと形状で、ビニールのようなテラテラした光沢を水面上にわずかに浮かべていた。まだ岸辺から三十メートル以上も沖合で、それがいったい何なのか正体不明だが、ことによると人間の土左衛門——といった不吉な想像さえあっただけに、西山はひとまずほっとした。

「なんかよく分からんが、どうやらゴミのようだな」

「しかし、ただのゴミとは違うずら、やっぱり猫の死骸でも詰めてあるんでねえか」

それは微風に押されて、ゆっくりと岸に近寄ってくる。それとともに不快な腐臭はますます強烈になった。

「こりゃたまらんで」

二人は風下を避け、やや上流寄りに位置をかえて、おそるおそる漂流物の接近を待った。釣った魚は水から引き揚げてクーラーに納った。すでに釣りを続ける気分ではなくなっている。

岸から三メートルほどの水面に水没した枯木の梢が突き出ていて、漂流物のどこかがそれにひっかかったらしく、そこで停まった。思ったとおり表面は袋状のビニールで覆われ、水がいっぱいに入りこんでいるから、おりふし風が止み漣が消えると、まるで氷塊のように中の物体がくっきりと透けて見えた。

それはまさに禍禍しいという表現がぴったりの異様な光景であった。西山も佐野も現実に見ているものを信じたくない、一種の拒絶反応を起こしていた。その心のタガを外せば堪えがたい嘔吐感に襲われるに違いないと直感し、事実、そのあとでほとん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com